要点整理

論説・評論文の内容説明問題と同様に、傍線部の意味内容やそれにかかわるさまざまな事柄を、その前後の文脈から把握させる設問である。その代表的な設問形式には次のようなものがある。

・傍線部「……」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

・傍線部「……」とあるが、この場面の説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

◎解法のポイント

① まず傍線部の内容を把握する。特に比喩表現、作者独自の用語法、特別な意味を込めた語句などがよく問われるので、前後の文脈に手がかりを求めてその意味内容を把握する。その場の状況、各登場人物の立場や心情、人物どうしの関係などを総合的にとらえたうえで、傍線部の意味内容を特定することが大切である。

② 小説の内容説明問題には心情の理解も含まれていることが多いので、心情説明の解法のポイントもおさえる。小説の内容説明問題は「どういうことか」という単純な問い方だけでなく、出来事を起こった順に並べたり、本文全体から推測できることを読み取ったりするなど、ケースバイケースでさまざまな事柄が問われる。過去問を数多く解いて、どのような設問にも対応できる実戦力を養うことが重要である。

演習問題A

次の文章は、森鷗外の小説『護持院原(ごじいんがはら)の敵討(かたきうち)』の一節である。宇平の父三右衛門(さんえもん)は、ある夜、藩邸に金目当てに押し入った亀蔵(かめぞう)に殺害される。宇平は叔父九郎右衛門(くろうえもん)と、唯一敵の顔を知っている家来文吉とともに敵討ちの旅に出た。敵を討つまでは帰れない厳しい旅である。諸国をめぐった後、大阪の宿摂津国屋(つのくにや)に入った三人は、日々、乏しくなった旅費を稼ぎながら敵を探していた。本文はそれに続く場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

その時九郎右衛門、宇平の二人は文吉に暇(いとま)をやろうとして、こう言った。これまでも我々はただお前と寝食をともにするというだけで、給料というものもやらず、名のみ家来にしていたのに、お前はよく辛抱して勤めてくれた。しかしもう日本全国をあらかた遍歴してみたが、敵はなかなか見つからない。この按排(あんばい)では我々が本意を遂げるのは、いつのことか分からない。事によったらこのまま恨みを呑(の)んで道路にのたれ死にをするかも知れない。お前はこれまで詞(ことば)で述べられぬほどの親切を尽くしてくれたのだから、どうもこの上いっしょにいてくれとは言いかねる。もちろん敵の面体(めんてい)を見識(みし)らぬ我々は、お前に別れては困るに違いないが、もはや是非に及ばない。ただ運を天に任せて、名告(なの)り合う日を

プラスα 読解のポイント

(1) 単純に傍線部の内容を説明させる内容説明問題もあるが、それだけにとどまらず、心情説明や理由説明などをふまえた説明を要求されることもある。さまざまな要素が含まれうるのがこの種の設問の特徴である。

(2) 選択肢のなかにはかなり微妙な言い回しのものがあり、迷わされることが少なくない。内容的に正しいかどうかよりも、表現的に適当かどうかを基準にしなければ判別できないような類のものもある。決め手となる語句の正確な意味や微妙なニュアンスの違いをおさえて判断しなければならない。

(3) センター試験の過去問には良問が豊富にそろっているので、それらを数多く、また繰り返し解いてみるとよい。

重要語句

◇暇＝職務をやめること。「ひま」ともいう。

◇遍歴＝広く各地を歩き回ること。

◇按排＝①物事の具合。調子。②ほどよくものを並べること、処理すること。③料理の味加減を調えること。味加減。用法「按配・塩梅」などとも書き、①

待つよりほかはない。お前は忠実この上もない人であるから、これから*主取りをしたら、どんな立身もできよう。どうぞここで別れてくれと言うのであった。

九郎右衛門はかねて宇平に相談しておいて、文吉を呼んでこの申し渡しをした。宇平は側で腕組みをして聞いていたが、涙は頬を伝って流れていた。

黙って衝っ伏して聞いていた文吉は、詞の切れるのを待って、頭を擡げた。睜った眼は異様に赫いている。そして一声「檀那、それは違います」と叫んだ。心は激して詞はしどろであったが、文吉はおおよそこんなことを言った。このたびの奉公は当たり前の奉公ではない。敵討ちの供に立つからは、命はないものである。お二人が首尾よく本意を遂げられればよし、万一敵に多勢の悪者でも荷担して、*返り討ちにでも逢われれば、いっしょに討たれるか、その場を逃れて、二重の仇を討つかの二つよりほかはない。足腰の立つ間は、よしやお暇が出ても、影の形に添うように離れぬと言うのであった。

①さすがの九郎右衛門も詞の返しようがなかった。宇平は蘇った思いをした。

それからは三人が摂津国屋を出て、*木賃宿に起き臥しすることになった。もうどこをさして往ってみようという所もないので、ただ已むに勝るくらいの考えで、神仏の加護を念じながら、日ごとに市中を徘徊していた。

そのうち大阪に*咳逆が流行して、木賃宿も咳をする人だらけになった。三月の初めに宇平と文吉とが感染して、熱を出して寝た。九郎右衛門は自分の貰った銭で、三人が一口ずつでも粥を啜るようにしていた。四月の初めに二人が*本復すると、こんどは九郎右衛門が寝た。体は巌畳でも、年を取っているので、容体が二人より悪い。人のよい医者を頼んで見てもらうと、*傷寒だと言った。それは熱が高いので譫言に「こら待て」だの「逃がすものか」だのと叫んだからである。

木賃宿の主人が迷惑がるのを、文吉が宥め賺して、病人を介抱しているうちに、病みつきの急劇であったわりに、九郎右衛門の強い体は少ない日数で病気に打ち勝った。

九郎右衛門の恢復したのを、文吉は喜んだが、ここに今一つの心配が出来た。それは不断から機嫌の変わりやすい宇平が、病後に際立って精神の変調を呈して来たことである。

宇平は常はおとなしい性である。それにどこか世馴れぬぼんやりしたところがあるので、九郎右衛門は若殿と綽号を附けていた。しかしこの若者は柔らかい草葉の風に靡くように、何事にも強く感動する。そんな時には常蒼い顔に紅が潮して来て、別人のように能弁になる。それが過ぎると反動が来て、沈鬱になって頭を低れ手を拱いて黙っている。

宇平がこの性質には、叔父も文吉も慣れていたが、今の様子はそれとも変わって来ているのである。朝夕平穏な時がなくなって、始終興奮している。苛々したような起ち居振る舞いをする。それにいつものような発揚の状態になって、饒舌をすることは絶えてない。むしろ沈黙がちだと言ってもよい。ただ興奮しているために、瑣細なことにも腹を立てる。また何事もないと、わざわざ人を挑んで詞尻を取って、怒りの動機を作る。さて怒りが生じたところで、それをあらわに発動させずに、口小言を言って拗ねている。

---

③の意味で用いるときは「塩梅」と、②の意味で用いるときは「按排・按配」と主に表記される。
◇本意＝本来の望み。本懐。ここでは敵である亀蔵を討つこと。
◇親切＝心の底からすること。「深切」とも書く。現代語の「親切（＝人のために好意をもって尽くすこと）」とは意味が異なる。
◇面体＝顔かたち。面相。
◇立身＝社会的によい地位に立つこと。「立身出世」とよく使われる。
◇擡げる＝持ちあげる
◇しどろ＝ひどく乱れているさま。ふつう「しどろもどろ」という。
◇首尾よく＝うまい具合に。
◇討つ＝相手を攻め滅ぼす。特に、刀で斬り殺すことをいう（「首を討つ」）。
◇よしや＝たとえ。仮に。
◇起き臥し＝①起きることと寝ること。②毎日の生活。
◇已むに勝る＝しないで済ませるよりはましだ。
◇加護＝神や仏が守り、助けること。
◇徘徊＝うろうろ歩き回ること。
◇世馴れる＝さまざまな経験をして世間のことをよく知っている。
◇能弁＝話が上手で、よくしゃべること。本文中の「饒舌」とほぼ同意。
◇手を拱く＝腕組みする。何もしないでいる。「手をこまねく」ともいう。

こういう状態が二三日続いた時、文吉は九郎右衛門に言った。「若檀那の御様子はどうも変じゃございませんか。」文吉は宇平のことを、いつか若檀那と言うことになっていた。

九郎右衛門は気にも掛けぬらしく笑って言った。「若殿か。②あの御機嫌の悪いのは、旨い物でも食わせると直るのだ。」

九郎右衛門のこう言ったのも無理はない。三人は日ごとに顔を見合っていて気が附かぬが、困窮と病痾と羇旅との三つの苦艱を嘗め尽くして、どれもどれも江戸を立った日の俤はなくなっているのである。

文吉がこの話をした翌日の朝であった。相宿のものがそれぞれ稼ぎに出た跡で、宇平は九郎右衛門の前に膝を進めて、何か言い出しそうにしてまた黙ってしまった。

「どうしたのだい」と叔父が言った。

「実は少し考えたことがあるのです。」

「なんでもいいから、そう言え。」

「おじさん。あなたはいつ敵に逢えると思っていますか。」

「それはお前にも分かるまいが、己にも分からんのう。」

「そうでしょう。蜘蛛は網を張って虫の掛かるのを待っています。あれはどの虫でもいいのだから、平気で待っているのです。もし一匹のきまった虫を取ろうとするのだと、蜘蛛の網は役に立ちますまい。わたしはこうして僥倖を当てにしていつまでも待つのがいやになりました。」

「随分己もお前も方々歩いてみたじゃないか。」

③「ええ。それは歩くには歩きましたが」と言いかけて、宇平は黙った。

「はてな。歩くには歩いたが、何が悪かったと言うのか。かまわんから言え。」

宇平はやはり黙って、叔父の顔をじっと見ていたが、しばらくして言った。「おじさん。わたしどもは随分歩くには歩きました。しかし歩いたってこれは見つからないのが当たり前かも知れません。じっとして網を張っていたって、来て掛かりっこはありませんが、歩いていたって、打っつからないかも知れません。それを先へ先へと考えて見ますと、どうも妙です。わたしは変な心持ちがしてなりません。」宇平はまた膝を進めた。「おじさん。あなたはどうしてそんな平気な様子をしていられるのです。」

宇平のこの詞を、叔父は非常な注意の集中をもって聞いていた。「そうか。そう思うのか。よく聴けよ。それは武運が拙くて、神にも仏にも見放されたら、お前の言う通りだろう。人間はそうしたものではない。腰が起てば歩いて捜す。病気になれば寝ていて待つ。神仏の加護があれば敵にはいつか逢われる。歩いて行き合うかも知れぬが、寝ている所へ来るかも知れぬ。」

宇平の口角には微かな、嘲るような微笑が閃いた。「おじさん。あなたは神や仏が本当に助けてくれるものだと思っていますか。」

九郎右衛門は物に動ぜぬ男なのに、これを聞いた時には一種の気味悪さを感じた。「うん。それは分からん。分からんのが神仏だ。」

◇発揚＝気持ちが高ぶること。本文中の「興奮」とほぼ同意。
◇詞尻＝言い間違えたり、言い方が適切でなかったりする部分。
◇羇旅＝旅。旅行。
◇膝を進める＝座ったまま、前ににじり出る。
◇僥倖＝思いがけない幸運。ここでは敵に出会うこと。
◇口角＝口のわき、端。
◇物に動じない＝何が起こっても動揺しない。

宇平の態度は不思議に*恬然(てんぜん)としていて、いつもの興奮の状態とは違っている。「そうでしょう。b神仏は分からぬものです。実はわたしはもう今までしたようなことを罷(や)めて、わたしの勝手にしようかと思っています。」

九郎右衛門の目は大きく開いて、眉(まゆ)が高く挙がったが、見る見る蒼ざめた顔に血が升(のぼ)って、拳(こぶし)が固く握られた。

「ふん。そんなら敵討ちは罷めにするのか。」

宇平は軽く微笑(ほほえ)んだ。おこったことのない叔父をおこらせたのに満足したらしい。「そうじゃありません。亀蔵は憎い奴(やつ)ですから、もし出合ったら、ひどい目に逢わせてやります。だが捜すのも待つのも駄目ですから、出合うまではあいつのことなんか考えずにいます。わたしは晴れがましい敵討ちをしようとは思いませんから、*助太刀もいりません。敵が知れれば知れる時知れるのですから、*見識人(みしりにん)もいりません。文吉はこれからあなたの家来にしてお使い下さいまし。わたしは近いうちにお暇をいたすつもりです。」

九郎右衛門が怒りは発するや否やたちまち解けて、宇平のこの詞を聞いている間に、いつもの優しいおじさんになっていた。④ただ何事をも強いて笑談(じょうだん)に取りなす癖のおじが、珍しく生真面目になっていただけである。

宇平が席を起って、木賃宿の縁側を降りる時、叔父は「おい、待て」と声を掛けたが、宇平の姿はもう見えなかった。

しかし宇平がこれきりいなくなろうとは、叔父は思わなかった。

◇生真面目＝非常に真面目すぎ、融通に欠ける様子。

（注）主取り…新しく主人に仕えること。
返り討ち…敵討ちをしようとして、反対に自分が討たれること。　木賃宿…安宿。
咳逆…せきの出る病気。　本復…病気がすっかりなおること。
傷寒…漢方医学で、激しい熱病。チフスの類。　病痾…長引く病気。
苦艱…苦難。　恬然…動揺せず、平然としている様子。
助太刀…敵討ちなどをする人に加勢すること。また、その人。
見識人…犯人の顔を見知っている人。

問一 ――線①「さすがの九郎右衛門も詞の返しようがなかった。宇平は蘇った思いをした」とあるが、二人は文吉の言葉をどのように受けとめたのか。その説明として最も適当なものを次の**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えよ。

ア 文吉の未来を案じて敵討ちから解放してやろうと思った九郎右衛門は、文吉の信念を聞いてその気持ちがうれしく、言葉も出せないでいたが、宇平は文吉の言葉に勇気づけられ、敵討ちの成就を確信している。

イ なかなか敵が見つからずあきらめかけていた九郎右衛門は、文吉を解放しようとして逆にさとされ、内心恥ずかしく思い返答に窮したが、宇平は仲間の人数が減るのを恐れていたので生き返った思いがした。

ウ 忠実な家来としか見ていなかった文吉から思いがけず敵討ちの理念を聞かされた九郎右衛門は、驚き、感心し、言葉を失ったが、宇平は二人だけでは討ち死にするしかないと覚悟していたので助かった思いがした。

エ 経済的な困難から文吉を去らせて急場をしのごうとした九郎右衛門は、文吉の言うことが自分の考えに通じるだけに言い返せず黙ってしまったが、金銭的なことに気が回らない宇平は素直に喜んでいる。

ヒント

△内容説明を求める設問。九郎右衛門、宇平の心情把握がポイントになる。

オ　文吉を苦難から解放しようとした九郎右衛門は、逆に供としての覚悟を聞かされ、忠義に満ちた正論ゆえに反論のしようもなかったが、宇平は文吉が去るのを心細く思っていたので救われる思いがした。　〔　　〕

問二　——線②「あの御機嫌の悪いのは、旨い物でも食わせると直るのだ」とあるが、九郎右衛門は宇平の様子をどのように見ているのか。その説明として最も適当なものを次の**ア**〜**オ**から一つ選び、記号で答えよ。　〔　　〕

ア　宇平をまだまだ未熟だと思っている九郎右衛門は、宇平の心の変化を、旅の苦難が引き起こした肉体的な衰弱からくるいらだちぐらいに受けとっている。

イ　宇平が何不自由なく育ったことをよく知る九郎右衛門は、宇平の変化は食事の貧しさによると見ており、なんとか栄養のあるものを食べさせたいと考えている。

ウ　苦難をともにする文吉をいたわる九郎右衛門は、文吉を心配させまいとして冗談を言ったまでであり、内心では宇平の変調と栄養状態は関係ないと思っている。

エ　物事を気にせずおおざっぱな性格の九郎右衛門は、宇平のきまじめさが理解できず、宇平は短気を起こしているだけで、忍耐力が不足しているととらえている。

オ　思慮深い性格の九郎右衛門は、敵討ちに支障がないよう、冗談に紛らわしているが、心の内では、度重なる苦難に宇平は耐えられなくなってきたと見ている。　〔　　〕

問三　——線③「『ええ。それは歩くには歩きましたが』と言いかけて、宇平は黙った」とあるが、宇平の心情の説明として最も適当なものを次の**ア**〜**オ**から一つ選び、記号で答えよ。

ア　すぐには敵に出会うこともあるまいと考えた宇平は、蜘蛛のように監視の網を張りつつも一方で生活を整えることも大切だと話し始めたのだが、生活のことには全く関心のない叔父に、なかなか理解されないともどかしく思っている。

イ　敵討ちに意味を見いだせなくなった宇平は、敵がいかにつまらない人間であるかを蜘蛛の網にかかる虫にたとえて話そうとしたのだが、歩き回って探す努力を強調するだけの叔父に、これ以上何を言っても仕方がないと失望している。

ウ　敵を探す苦難に耐えられなくなった宇平は、蜘蛛の網をたとえに敵に出会う確率の低さを話そうとしたのだが、各地を歩いたことを語る叔父の言葉に、あらためて三人が心を一つにし苦労した旅を思い出し、感傷的になっている。

エ　敵が現れるのを待ち続けることに嫌気がさした宇平は、網を張っていても無駄であり、方法自体が間違っていることを蜘蛛の網をたとえに話し始めたのだが、いつもと違う威圧的な叔父の態度に、気後れがして話しづらくなっている。

オ　敵にめぐりあう可能性に疑問を持った宇平は、出会う可能性はほとんどないのだという思いを蜘蛛の網にたとえて話し始めたのだが、そのたとえを単に待つことと受けとるだけの叔父に、そんな問題ではないのだがと困惑している。　〔　　〕

△内容説明を求める設問。特に、九郎右衛門がふだん宇平をどのように理解しているかを、傍線部の近辺から読み取る。

△心情説明を求める設問。「文吉がこの話をした翌日の朝であった」という文以下において、九郎右衛門と宇平のちぐはぐな会話が展開する。これを通してそれぞれの真意を把握する。

◇気後れ＝自信がなく、相手の勢いに押されて心がひるむこと。臆すること。

問四 ——線④「ただ何事をも……珍しく生真面目になっていただけである」とあるが、九郎右衛門はなぜ「生真面目になっていた」のか。その説明として最も適当なものを次の**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えよ。

ア 宇平の言葉を聞いた九郎右衛門は、今しばらくは一緒にいるつもりらしいと安心したが、一方で宇平の緊迫した様子に、短い間にどうやって彼を説得し引き留めるか、その困難さに思い至ったから。

イ 宇平の言葉を聞いた九郎右衛門は、自分をおこらせたことに満足したらしいその言動に幼さを感じて哀れに思い、宇平には年長者のゆとりを持って誠実に応対してやらねばならないと判断したから。

ウ 宇平の言葉を聞いた九郎右衛門は、宇平が敵への憎しみを失っていないことに喜んだが、冷静さを欠いたその物言いに深刻な精神の変調を見いだし、旅の苦労をあらためて思い返したから。

エ 宇平の言葉を聞いた九郎右衛門は、敵討ちに対する理屈や言い分、心情を十分に理解したわけではなかったが、宇平の言動の落ち着きぶりと真剣さの中に、ただならぬものを感じとったから。

オ 宇平の言葉を聞いた九郎右衛門は、敵討ちについての現実的な考え方を知り、感心しなかったわけでもないのだが、その意見にしたがうと宇平と別れることになるので、寂しい気持ちになったから。

〔　　〕

問五 ～～線a「分からんのが神仏だ」、b「神仏は分からぬものです」とあるが、九郎右衛門、宇平それぞれの神仏に対する見方に基づく考え方の説明として最も適当なものを次の**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えよ。

ア 九郎右衛門は、神仏の存在は知り得ないものではあっても、ひたすら信じれば必ず道は開けるものだと考えているのに対し、宇平は、神仏などもともと存在しないのであるから、あまり見込みのない努力はするだけ損であり、人生はもっと打算的、功利的に歩んでもよいはずだと考えている。

イ 九郎右衛門は、神仏は人間にとってよく分からないからこそ理屈を超えて信仰すべきものであり、御利益を願って三人そろって努力すべきなのだと考えているのに対し、宇平は、神仏の救いなどあるはずがなく、結局人間は孤独な存在であり、孤独なままに人生を終えるものだと考えている。

ウ 九郎右衛門は、目的が達成できるか否かは神仏の加護によるものであり予測は付かないが、それでもできるだけ努力すべきだと考えているのに対し、宇平は、いくら努力しても神仏の手助けがあるとは限らないのだから、神仏に頼るような偶然を当てにする生き方はしたくないと考えている。

エ 九郎右衛門は、人の運命は神仏によって与えられているものなのだから、なりゆきにしたがいながらも努力することが大切なのだと考えているのに対し、宇平は、神仏を否定しながらも運命の存在は信じているので、人生はただなりゆきにまかせるほかはなく、努力しても無駄だと考えている。

オ 九郎右衛門は、目的のためには今を犠牲にして生きることをも辞さない禁欲的な生き方こそが神仏の意思にかなう正しい生き方であると考えているのに対し、宇平は、もともと神仏の意思を信じておらず、したがって、今生きている時を大切にして人生を楽しむべきだと考えている。

〔　　〕

△理由説明を求める設問。敵討ちについての宇平の考えを聞くうちに、九郎右衛門の心情がどのように推移したのかを読み取る。

△内容説明を求める設問。神仏の加護に対する九郎右衛門と宇平それぞれの考えを読み取り、敵討ちをめぐる今後の身の処し方の違いを把握する。

◇打算的＝物事に対して、損得勘定で取り組むさま。

◇功利的＝物事が自分の利益になるかどうかをまず最初に考えるさま。

◇御利益＝「ごりやく」と読む。①神や仏からの恵み。利益の尊敬語。②効能。効験。